毎月一回15日発行昭和48年2月15日発行・第39号（昭和45年9月4日第三種郵便物認可）

リベルテール

2月号

Libertaire Vo,Ⅳ,No2

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月　四日第三種郵便物認可
発行第三十九号　定価一〇〇円（送料共）

リベルテール　一部　100円

Le Libertaire　毎月一回15日発行

昭和48年2月15日発行　Vo, Ⅳ No2

編集兼発行者　三浦精一

発行所　東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方
リベルテールの会

（振替東京133830番　三浦 精一）

リベルテールが創刊されたのは一九六九年十二月で、その創刊号には「アナルシズムは永遠の思想であり、普辺の思想である。これを歴史的、地理的、社会学的、経済学的に究明しようとする意欲的な若いリベルテールが全国的に、国際的に結ぶ機関である」ことを宣言した。

それから三年、リベルテールはまだこの期待を実現しているとは言えない。しかしリベルテールは、アナルシズムが自由、平等、友愛という昔ながらの三原則に立って、最高の秩序アナルシーを実現しようとするアナルシスト（リベルテール）のグループであることに変りはない。したがって現代社会の階層的権力構造を、人間の狡知と欺瞞にもとずくものとして否定し、万人一人一人の生の充実を実現しようとする社会的な変革を目指すものであることにおいても変りはない。

こうした変革への過程において暴力、非暴力の二つの手段が考えられる。しかし暴に対して暴をもってすることが、如何にも勇壮で合理的で容易だとしても、暴力を用いること自体が他に対する権力行使であることを知るがゆえに、リベルテールは非暴力を立場とする。もちろん暴力と非暴力の境界は微妙だということ、非暴力は暴力主義以上に困難な道であることは承知の上である。この立場で連合し、連帯し、反権力、反戦の戦を戦かう　（三浦）

目　次

アナルシーとは何か　仏「エゴー」誌　1
―1―

戦後の思い出　9　杉藤二郎　7

松本健一氏へ　はしもと・よしはる　11
―思想とは何か？―

暴力団を脅かした下足番　萩原晋太郎　14

野火　19

アナルシーとは何か　―1―

マルセーユのビアンコ君から「エゴー」第12号の「アナルシーとは何か」について、フランスにおける中心的な議論で8名の意見を特集したものを送って来た。とにかく訳して見る。賛否について、諸君の批判を待つ。

（三浦）

アナルコスかアナルキアか

ジャン・ピエール・シュワイツアー

アナルシーを定義するって？　骨の折れる仕事だ。これについては私よりも有能な人たちが何度も手をつけてしかも本当にやり上げたことはないのだ。

自由としてのアナルシーは、多分何よりも、あらゆる定義を嫌悪する概念だろう。

キリスト教はしばしばわれわれに信仰の「神秘」を語る。すなわち合理性の水準で説明できない真実（たとえば聖変化といったもの）のことである。私もまたこの問題に取組んで、このアンケートに答えて見たい。

だが、私は合理主義者ではないのだが、私の理性的能力を使用しない訳には行かないし、この『神秘』（多分私には信仰がないのだろう？）を深く探らない訳には行かない。

否定的方法は、少くとも最初はこの探究に一番適当なものように思われる方法である。もし私がアナルシーは何かについて言うことができなければ、多分私は、それについて、何がそうでないかを言えるかも知れない。

このために私は歴史を攻撃しなくてはならない。というのは歴史は私に誤謬を教えるからである。

実際、歴史的に言って、アナルシーを要求した政治運動はいつでも、社会主義者、あるいは共産主義者のインスピレーションだったのだ。（『非権力』共産主義あるいは社会主義でもそうだ）。ダニエル・ゲランがその著『アナルシズム』の第一章の中で、『アナルシーは何よりもまず社会主義の同義語である』（ＮＲＦ一九六五年版）と言っていることでもそうなのだ。

彼等がこのような名称に用いることができたこの言葉は語源学的に限定された意味からとったものである（『アナルシー』は主人のない、あるいは国家のないという意味のギリシヤ語『アナルコス』から出たものである）。ユベール・デシャーンがその著『黒色アフリカの政治制度』（ＰＵＦ一九六二年）の『諸アナルシー』という

章で使用しているのはこの意味である。彼はアフリカの土人について書いたが、彼等の間には何一つ政治組織は存在しない。『命令の必要はない。公共的な力の必要もない。紛争は社会的な差別がないために、構成員の一人が他の人々の上に立つことの不可能性によって、特に祖先の習慣にすべての者が自然的に服従することによって、最小限に止められる』。

だから、この実例から国家あるいは政府の欠如ということは、必ずしも「自由」を意味するものではないと思われる。（習慣の抑圧は、クロポトキンが何と考えようと、われわれの近代政府の圧制以上に抑圧的だということは確実である）。それはさらに「平等」を意味する。

そして、しかも今まで『アナルシスト』の運動なるものが求めて来たものは自由というよりもこの「平等」なのである。

したがってわれわれはここに、共同主義者ー個人主義者の論争の中心そのもの、すなわち平等と自由の問題の中心にあるのである。

しかし、それはどんな平等についてだろうか。知性の平等についてか。物質的あるいは美的平等か。ちがう。それはいつでも経済的平等についてである。われわれに人類のあらゆる悪に対して万能薬として示されている（同語反復だ！）経済的平等だ。私の家政婦（そうだ、私は一人の家政婦を雇っている。ブルジョアなのか、そうでないのか）が今日一時間七フランとるのだが、私同様に七十フランをとったら、すべてがうまく行くのだろう。

少くともこれがマルクス主義者やマルクス主義同調者たちが考えていることだ。

個人として、私にはこうしたことは、はっきりしない。人は平均して、金銭に貪欲だったり、羨望的だ。平等主義者の革命がこれには何の変化も与え得ないだろう。

仮りに、リベルテールの新制度が経済的平等を与えるとして、誰がわれわれに「彼等は」満足しているだろうと言えるか。彼等は不機嫌な上に攻撃的にもなって、物理的あるいは知的平等を要求しないだろうか。（これがまたL・P・ハートレーが彼のユートピア小説、というよりもむしろ反ユートピア小説「表面的正義」の中でとり上げていることである。）その日になったら、多分私は平等主義者になるだろう。というのは私は私の醜悪さ、肉体の虚弱さに、私の経済的限界（一ケ月一〇〇フランかかる家政婦を雇っていることも本当だ）以上に苦しんでいるからだ。

妥協主義の連中はしばしば今日、自由と平等が相互に

相排する概念だということを理解しないで、この二つの復権を調和させようと試みたし、今でも試みている。しかし、選択しなければならない。平等は自由を犠牲にしてしか発達しない（あるいはむしろ賦課されるものである。平等は自然に反するものだからだ。自然ということは偶然であって必然ではないと私は考えている）。

政府と社会的拘束（あるいは道徳）は主として二つの理由で存在する。一方では、人間というものは一般に、権力主義者で不寛容であり、自分たちの望むところと対立し合う悪を支持するし、自分の意志を仲間の者に押しつけ、支配することに一種の喜びさえも持つものだからである。他方、彼等人間は安全性の欠如によって存在するからである。（安全性というものは自由とは二律背反のものだとアンダーラインを引こう）。人間は社会に集団する。ところがいかなる集団もあるいは社会も拘束と強制なしにはまともに機能しない。こうした拘束は『ユベール・デシャーンのアナルシーにおけるごとく、神秘的な秩序（タブー）なのか。あるいは（たとえばフランスの警察の保全共和隊の棍棒のような）非常に明白なものかも知れない。その結果は個人に関して、それでもなお同じだという訳には行かない。個人はこのようにして彼自身の罠にかかっているのである。

社会はその中に、雲が自分の中に暴風雨を持っているように、権力主義を持っているのだ（ジャン・ジョレスを言いかえることを許してくれるだろうか）。そして『アナルシストの社会』が言葉のもっとも厳格な意味で空想的であると想像して見ることを許してくれるだろうか。これは「いかなるところにも」（ギリシヤ語のユ・トピア）決して存在しない社会を想像することである。

『社会主義同調者たち』のすべての空想は、トマソ・カンパネラの『大陽の都』から、カンディドが訪問した『エルドラド』を過ぎて、ウイリアム・モリスの『無何有郷だより』にいたるまで、人間の『自然の』善良さと人間に常住する正義の意識に同様に信頼することから出ている。

信頼、これはまたその外のフーリエ、プルードン、クロポトキン、そして多分それに続いた、あるいはさらに歴史の場面で続いて行く、すべての社会主義者やリベルテール共産主義者が持つものである。

こうした無邪気さのために、十六世紀に生きたカンパネラ、あるいはさらに二世紀後のルソーを実行することができるとすれば、（というのは『リスボンの悲劇の歌』の著者がそれについて何を行っているにせよ、ルソーに対するカンパネラの影響は大きかった）、思想、それと

同時に科学的（特に心理学を社会学の領域で）実験や研究を繰返し繰返し継続して、毎日矛盾している現代人にとっては、それを同じようにやることは非常にむつかしいことになる。

だから、あらゆる国家的、社会的拘束からの自由「社会」を意味するものとしてのアナルシーは、これ以上にわれわれの注意を引き止めるべきものとは考えられない。

今後、アナルシーは、たとえばマルクス主義、社会主義、あるいは国民社会主義と同様に経済・政治学説であるとしてしか考えられない。これは実際において個人的態度、人生を見つめる方法、一つの哲学、一つの知慧である。

したがって、今度はアナルシーをもっと広い意味で、命令のないという意味のギリシア語の『アナルキア』そしてまた「権力のないこと」を意味することのできる言葉から引いて、今後は第二の語原的可能性に照らして見ることが適当である。

アナルシーについての共同主義者のいろいろな公式は概して人間についての間違の多い、そして同時にナイーヴな概念だということは、すでに見て来た通りである。

個人主義者の主張、特にスチルナーの個人主義は、一方では未来に関して思索することを差しひかえている点でまた他方では、現実の人間を示していて、このようにありたいと望むといったものではないといった点で優れている。

人はスチルナーを『エゴイズムの予言者』と呼んだ。それは彼がフォイエルバッハの人道主義の偽善の仮面を投げ捨てて（L・フォイエルバッハの『キリスト教の本質』を参照せよ）、愛も愛他主義も何等『無私』の感情などではなく、それらもまた人間の快楽主義の祭壇に犠牲を捧げるに過ぎないと結論するような式で証明した。

この『意識的エゴイズム』あるいはむしろエゴイズムの「意識」をスチルナーは説いたのだが、これは何等エゴイズムの「実践」を含んではいない。ところが、スチルナーの中傷者たちもあらゆる種類の俗物共も決して分っていないのはこの点である。

スチルナーは古代の知者の「人よ汝自身を知れ（ギリシャ語グノーティ・ソートン）を繰返したに過ぎない。彼の所論は全然道徳的でもなく、非道徳的でもない。だが哲学的である。彼は、エゴイストになれとは言わないが、君はエゴイストだ、このことを知れと言うのだ。

実際、スチルナーの全使命は、意識に対する、そして理解に対する激励である。これのみが全面的な解放に、自由に導くことができるのだ。これは何よりもまず意識

を、その『唯一者』と捕えることによってである。それから、人間の服従を策謀するいろいろな幽霊（神、家族、祖国、人間族）から人はこの意識そのものを捕えることによって解放されるのである。（これは事実精神分析学の素描である）。

スチルネリアンの見地から考えをアナルシー（スチルナー一八〇六ー一八五六はブルードン一八〇九ー一八六五と同時代人だったが、たがいに知り合ってはいない。彼はアナルシストと呼ばれている）は、したがって、何等共同主義者に応じたものではない（一部の者たちが『エゴイストの連合』の中にスチルネリアンの考え方の『社会的』な面を見ようとした努力にかかわりなく）。事実、『エゴイストの連合』によって、スチルナーは決して「意識的エゴイスト」の間の一時的な連合の可能性を暗示しようとは望まなかった。すなわち、その連合は個人の、というよりも個人主義者の弱い小数者でしかないのだ。彼の著書の中で、スチルナーが、ほんの一瞬間でも、彼の哲学への大量転向の偶発事を考えたとは全然ありそうもないことだ。

註、ここでも、そして前にも共同主義者という訳語を用いているが、これはコレクチヴィストの訳である。普通コレクチヴィストは集産主義者と訳されている。

そしてバクーニンも集産主義者とされているが、これは大きな間違いで、バクーニンはマルクス等のコミュニズムに対抗して、これを用いたので、クロポトキンの言う無政府共産主義と変らないものである。この文で用いられているコレクチヴィズムの意味は共同主義または集団主義として個人主義に対するものであり、日本の辞書に出ているような集産主義ではない。

註、連合と訳したのはアソシアシオンで、これは色々に訳されているが、ここでは連合とした。場合によって結社、組合、協会、連合などと訳される。

これは自由の「個人的」研究である。研究、それはもちろんいかなる時代であろうと、いかなる政体のもとであろうと遂行できる。そして、もしこの個性化と自由化の過程が、ある社会においては他の社会においてよりも容易に行われることが確実だとしたら、社会主義者、あるいは共産主義者（リベルテールにしても）の社会が、われわれの『資本主義者』の社会におけるよりも、特にこの進化に恵まれているという証拠は大いに少ない（レーニンは言っているではないか。自由はブルジョアの原則であると）。

スチルネルの個人主義は、しかしながら、何よりもま

ずドイツ哲学のもっとも純粋な伝統の中で生れたひとつの知的態度である。右派にせよあるいは左派にせよ、スチルナーは確実にヘーゲル主義者だったし、すべての彼の所論は不可謬的論理学といった刻印を帯びている。

それが必然であるにしても、それが不可欠でさえあるにしても、この態度、この個性化の過程は、この事に関して十分なものではない。

ヘーゲル主義者の観点、純粋に合理的な観点から、アナルシズムにおける個人主義の過程を考究すること、他の人々の自由に関して、闘争している個人の自由そのものについての研究は困難だということは確実である。

「アナルシスト」個人主義者は、実際は、セーヌ・サン・ドニで、まったく単純に『自分の庭を耕作する』ような、ベルリン人の「酒場」で世界を革命するような人間ではあり得ない。

アナルシスト個人主義者は、何よりもまず、彼にとって『本質的』であるところのある価値の『証人』である。これは単に彼自身の自由に愛情をこめているばかりでなく、各人の中に『住む』（ギリシャ語エスケノセン、ヘブライ語シェキナー、聖書ヨハネ福音書一章十一節）自由を同様に尊敬する信者（彼がこうした態度を『合理的』に正当化できない限りは）なのである。

この他者の自由を尊敬するという命令は、相当に彼の証言する形式を制限する。いかにして、多分この正義えの飢えや渇きを、同じ程度に感じていない人々の自由を犯すことなく、彼の叛逆を宣言するか。こうしたことがアナルシスト個人主義者のジレンマであり、これが私自身のジレンマである。そして私はここにひとつの決定的な解決をもたらすことを提議はしない。

それにしても同時に、いわゆる『直接』の行動や『個の奪還』が、誰にもせよアナルシスト個人主義を口にする人によって、真剣に考慮されることができようとは考えられない。

こうした自由を増進するといった行為は、そのうえに経済的、社会的不平等を平均することを彼等流に試みることを目的に持っている。もし自由が真実でなくてはならないとしたら、この研究が目指さねばならないのは、むしろいろいろな形の市民的反抗や消極的抵抗の方向である。

それぞれの表明の特別な様式に関しては、それらは可能性の機能、特にそれを把握するもの深い性質であるだけのことであろう。ある者（ソローの如き）は納税を拒否するだろうし、ある者（ルコワンの如き）は軍隊にノーと言うだろう。他の者（ガンジーの如き）は文明のすべてを否定するだろう。文明の成果がいかに大きくても、それは「彼のもの」ではなく、そのうえそれは彼の同胞の特性に合わないものだったのである。

こうした反逆の形式はいろいろであり、しばしばその土地により、特に時代によって非常に異なる。反逆はすべて共通に、他の者たちを巻きこまないように充分に注意して、個人として「誓う」主張者の意志である。

×

アナルコスか、アナルキアか

この二つの調和できない傾向は、対立したものであり

そして哲学的な面でも、行動の面でも、同時に、いつでも対立するであろう。それらは、事実、正反対に対立した目的が固定したからである。

私が強調したいと思ったのは、というよりむしろ『調整者』の精神で、だが特にその差を最小にするために研究したいと思ったのは、この深刻な非両立性である。事実において、私はアナルシストであることが欠くべからざることではない。その反対に、私は、人間であることを知ることこそ、それを言うことが大事であると同様に大切だと確信する。

原水爆禁止運動とインフレーション

― 戦後の思い出 9 ―

杉藤二郎

一九五四年（昭和二十九年）五〇銭以下の小銭は廃止となったが、農家の野菜は仲買いに買いたゝかれ、一束から三〇銭から五、六〇銭と値をつけられ、百姓の生活は苦しかった。この夏から原水爆禁止の署名運動が全国的に拡がった。また、ビキニ環礁に於けるアメリカ軍の水爆実験の灰を、航行中に受けて帰った静岡県焼津の漁夫久保山愛吉さんが医薬の効なく、九月二十三日に四〇才で生命を奪われた。その三日後の二十六日、青函連絡船洞爺丸が転覆し、一、〇一一人が死んでいる。その年、くしくも各地で、各産業労働組合がストライキを起し、その都度賃金が上昇、物価は安定を欠き、全くインフレ時代となった。私が関係した炭鉱々害に依る減収田の補償米価を別表に掲げる。この米価をもってしても、如何に物価が不安定であったかを伺うことができる。

別　表

鉱害補償米価（３等米）

註……1.2等米は郡内（２市１１ヶ町村）では毎年総収量のうち、６０Kg入り1.2表にすぎない。

年	石当り価額 米	石当り価額 麦
S	円	円
1946 (21)	1,406	510
1947 (22)	1,801	1,052 19
1948 (23)	3,698	1,063 20
1949 (24)	4,348	1,359
1950 (25)	6,047	1,506
1951 (26)	7,050	60Kg俵 1,859
1952 (27)	7,962 50	〃 2,000
1953 (28)	9,630	〃 2,110
1954 (29)	9,190	〃 2,038 (山元交渉)
1955 (30)	9,735	〃 2,038 (仝　上)
1956 (31)	9,530	〃 1,900
1957 (32)	9,820	〃 2,075
1958 (33)	9,795	〃 2,048
1959 (34)	9,830	〃 2,072
1960 (35)	9,890	〃 2,075
1961 (36)	10,250	〃 2,094

一九五五年八月六日はじめて原水爆禁止大会が全国各地で開かれた。私は飯塚地区労働組合（総評の下部組織）の栗原勇事務局長と計って、飯塚市の公会堂を借り、大会を主催した。その第一回は保守も革新も双手を挙げて賛同してくれたので、段取りがうまく行き大会も盛会だった。しかし、翌年の大会はそうは行かなかった。保守系の人は一人も参加せず、原水協をアカ呼ばわりするようになり、ことごとく反対にまわられてしまった。その原因は何処にあったか、当時は深い謎のように思われたが、なんでも鳩山一郎内閣が次第に評判の高まる原水協をやっかんで、運動を阻止する手段として、側近者を通じ全国の原水協を調査したようである。もっとも、原水協の活動は、何処の地域も共産党員が一番熱心で活潑に働いていたことは事実である。

アナキスト達も、一九五八年（昭和三十三年）の第四回原水爆禁止大会には多数参加し、中でも竜武一郎は、西本の指揮する一団に加わり、鹿児島県の与論島から東京会場の早稲田大学記念講堂まで平和行進した。歩くことに於て世論を喚起し、カンパも受けた。彼等の長距離行進に感激した名古屋市では、自動車や衣類まで寄贈する人が有り、東京の会場へ着いた時は、その車の中は寄贈品で一ぱい、車の外側は各国人が自国語でサインをしていた。まさに、世界大会の名にふさわしい記念物となった。

私は大衆から一人五円十円のカンパを受け、福岡県代表として出席した。その時、東京から、郷里のカンパをして呉れた人々に出した葉書を、披露する。

『私が福岡県代表の一人として本大会に参加することが出来ましたのは、皆さんの熱烈なる平和への願の結集によるものであります。私はこのことを身に徹し本大会を通じ世界の代表に、皆さんの意を訴えました。多くの外国代表も、われわれと同じ考えでした。緊迫した今日の内外情勢を分析する時、私達にできることは、より強力に平和運動、原水爆禁止運動を押進めることであり、それなくしては人類を滅亡から救う事はできないと言うことが判然としました。今後とも、この運動に絶大な協力をお願いすると共に、資金カンパの御礼を申し上げます。』

私と山鹿泰二の二人は、集会前の時間をさいて、会場前で『クロハタ』を売った。その時、山鹿さんは巾二尺長さ六尺程の『クロハタ』と大書した幟を立て、身体には前後にプラカードをつけたサンドイッチ姿であった。

（その山鹿さんが、たゞ今死亡されたと電話があった。時に一九七〇年十二月六日（日曜日）午前七時、死亡時間は午前五時で七十八才であった。）

一九五八年代に話を戻すと、それ以後、八月には原水爆禁止世界大会が、東京、広島、長崎で行われるようになったが、一九五九年からは、原水協組織にひゞが入り社会党と総評、民社党と全労グループ、共産党系の三つの組織となり、原水爆禁止運動が政治運動に変っていった。

原水禁運動に、アナ連が組織として参加したのは、前記第四回くらいのもので、その後はアナキスト達も個々に動くようになり、九州地協は最初から、私が原水禁運動に首を突込んでいた関係で、九州地方に於ける運動には副島、井原も積極的に参加し、会合では共産党員と激論をしたものである。特に井原は、当時の共産党の方針に対して、君等の意図していることは、古い時代の竹槍戦術にも似た行動にすぎない。と言い切って退場する一幕もあった。今にして、原水禁運動の推移をたどってみるとき、井原君に先見の明があったと思うのである。

アナキストの議員誕生

一、九五九年、この年は地方自治体の首長並びに議会議員の統一地方選挙の年である。近頃の選挙は、半年いや一年も前から運動が行われ法網をくぐって響応、買収が盛んである。立候補届出の日には既に当落が予想できるとさえ言われるご時世である。私の住む穂波町も、四月に町長及び議会議員の改選が行われる。町全体の人口は炭坑の斜陽化で幾分減ったとは言え、まだ四万を保っている。炭坑華やかなりし頃は、人口四万三千を数える大世帯であった。それだけに炭坑出身の議員が大半を占め町行政も炭坑の鼻息を伺って行われて来た。その惰性は今猶続いている。当時、私は秋松部落の公民館長（部落長）と駐在員（地域によっては連絡員と呼ぶ、役場の嘱託である。）を担当し、職業としては、二市十一ヶ町村の鉱害被害者組合連合会の事務局長をしていた。正確な記憶は薄れたが、年が明けてから、部落の顔役の来訪があり、四月の選挙に立候補するようすゝめられた。この部落には二期つとめる現職の議員Hが居り、しかもその人は私の家の隣りである。私宅を訪れた顔役の言葉に依れば、Hは今年の選挙には出ないと言明しているとのことである。然し、私は信じられなかった。H氏宅では、部落の人々をちょいちょい接待しているし、再出馬をそれとなくほのめかす節もある。私はその気配を顔役に話してみたが、彼等は私の言うことを、頑として受入れず、「Hは町の上水道条例作成のとき、住民の、殊に鉱害被害者である農民の既得権を侵害し、炭坑側に同調し、地域住民を不利にした。その為我々に顔向けならず、たとえ又議員に立候補しても部落は押さない。」と言い切るのである。私は二、三日回答を保留させてもらうことにし、翌日、博多に出て、副島、井原とも話合った。両者の意見として「地方議員でも権力の座には違いないが、生活費稼ぎでいいじゃないか、部落の要望に添うべきだろう。一つ、県会にも候補者を立てて政治屋共の悪口をしゃべってあるくか。」と言うことで、早急に小山一弥を佐賀県選に立てることにきめ、アナキスト連盟九州地協は、二人の立候補をみとめたのである。地協の了解を得た私は、部落の人々に、立候補を引受ける旨伝え、準備態制に入った。何しろ、秋松部落の有権者が全部固まっても当選数に満たない。最低四五〇票から五百票確保せねば、当選は覚束ないのに、秋松の有権者総数は三七〇である。その中、Hが百五十は取る。その外に他部落より立候補する者の縁者の票が二〇票はある。どんなに顔役が部落を固めても、私への確票は二百票とふまざるを得ぬ。大半を、他部落から確保する必要があった。私は毎日毎日、

足を棒にして、知人縁者を訪ねまわった。そして、最下位で当選したが、隣家のHは私と一票の差で落選であった。仕方のないとは言え、後味の悪いものだった。

佐賀県選の小山一弥は、没収覚悟の上であった供託金を、取られるどころか、も少し票があれば当選出来るというところまで行った。最初からその気はなかったとは言うものゝ残念だった。然し、副島、井原、小山のトリオで、あれだけ政治屋の悪態を並べ立てたにも拘らず、小山の得票が多かったことは、井原や副島という佐賀県名門出身者の応援があったにしろ、世の中には、これ程政治不信をいだいている人のあることを、実証したことであった。

一年議員というものは、何を発言しても、古参には相手にされず、あばれゝばあばれる程、ツンボ桟敷に追い込まれることは、町村議会も国会並みである。私としては、気力に於て劣るところはなかったが、四年間に出来た事と言えば、コネで特定の業者だけが利益を得る仕来りであった、公共物資の調達を、町内商店なら、どこでも役場に品物を納めることが出来るように、したぐらいのことである。二期目は、健康もすぐれず金もなく気も進まなかったが、応援者の熱意におされて断り切れず立候補した。言うまでもなく、出足もおそかったせいで落選した。選挙というものを経験してから、知りつくしていたはずの人の世の裏、表を、改めて見直す思いであった。よい勉強をしたと思う。

つづく

松本健一氏へ—思想とは何か？—

はしもと・よしはる

週刊「読書人」2月5日付の〈伝統的アナキズムへの照射〉を拝見して、非常に明快な一文で、示唆される箇所が多々あるにもかゝわらず、何かが欠けていると考え、この文を草しはじめました。勿論、貴方とは一面識の間柄で、昨年12月第3木曜日、〈近代学校〉の会合で討論した経験があります。ですからこの文は、単にマスコミの周辺を歩く人が、たまたま発言したアナーキズムに対するアナーキズム研究者のやっかみ半分のたわ言だとか、アナーキズム擁護の検察官のつもりで書くのではなく、思想とは何か？思想がある国の民衆に根づくとはどういうことか等、つまりお互いの研究途上での、相互研讃に資するが目的だと申しあげておきます。